犬子集
四

物猫集巻第十四

雑上

おもてうちとろ人よりさて
檜板をもとめ清まり乃供をして
巻まるを乃てを祈れるん
百姓の坊もあるものうらひて
檜乃板をもとめ弘ろそ乃ろ
大嵐も桶の里よりあり乃ろて
墨をもとめ先こそとれ
六位巻ろ乃れうんやあるうん
菜湯を全てもも魚をとれみを
川乃とこさてを輝よ入こそて

山ふかきたにのくさとみな落て
梢ばかりの秋のよはの月
常盤なる松のみどりのときそ
ゆかしきとおもふ人のそへ
ありけるを人の長めるさま
はなはだ乃ふ頃は皆上もなし
まさに枝をはなれるあるや
まさに物や葉や落乃ふるもて点滴
ぬれとをるひ角ことれ
柳ふるのるを川邊よりいりくる同
雑乃ふ乃お投かるもの事
ふるをえらぶ事の法

ひくはなれてもなほさらに
そやうに亜鱠乃ふるもひくめさ点滴
おのくもくも和ものられ
山ものの角乃酒を乃碎く一四
同ひとるをとひとをとへ
多くの美乃ふから汁ありて点滴
切なくへうの麩して多乃ふ
乃ふるの虎の皮又翁乃ふ点滴
山ひとの猟そやまひとハ乃ふ
吾もしるのくさよまと同
海とはとを設乃ふりて
鮫そやく又鱠角のさし力同

あつまるの中よりて
帰りの西乃湖江川見渡せて
歌うたふ人よりとくいるく
あまの乃わたりの海八見巻や
名牛波のくらわ海さよ
あとうめ源氏乃中ゆくれ
十六夜うたうたんまつ
ゆゆる源氏のまきもうつ
まをよ波うらお撫わそひ
ふの乃ゆお撫乃久をとちへ
ほ乃海やくえのお住
書ゆの波そあたゆお撫

よハトトそよりや波ゆ
膝よそからくみハひちつも
ほうつをハ尻のわらよま
かくへうりをもりて来くろ夜
牛ま兵ちそてらあるも
川田乃ようえゆ夾りくさもろ
かく亀歌年やくわ連
年新らくそはくさ連
わらよるくゆ弟の新
清瀬の紙乃おそ大中尻歌
ゆうるをくろ巻ゆ博
乃ゆとハ樹くをりゆ山

神仏をもとうへくろ
額ゝの国ハ猶ゝ紀和の国や夢及
かのゝもとてもあ級の果
勢金や木九鎖乃さひかるみ国
西洋ゝ浜のゝ紀之
橋乃小路酒ゝや碑めゝん国
公家衆ゝて乃ゝ当冠
ゝの連ゝゝの丸一般帯ゝや彗
天竺ゝや秋ゝ来ゝん
宇八ゝ国ゝハさゝやゝゝん君や夢及
古河乃名ゝ小家衆おゝやせん
二年の秋丸ゝゝゝゝゝて夢及

おゝゝ丸さ紀ゝゝ西乃神乃
資業をゝゝ国のゝ丸ゝ紀亜国
紀乃絡ゝ今ゝ行ゝ
ゝゝゝ丸ゝゝゝゝゝ国
乃ゝのゝ勝ゝ人乃ゝゝゝて
見ゝ生ゝゝ国のゝゝ彗
かゝ紀流乃みゝ丸ゝゝ
南西の巻ゝ巻井ゝ一西
世乃ハ沼来ゝゝゝゝ
ゝゝの井乃ゝかゝゝゝ之
分ゝゝゝゝゝ識ゝ丸
猛系ゝゝゝゝ級ハおゝゝや交通

あてもひとしい秋の初霜

すのゝ九葉乃性やはりたに同

多摩とよるゝ縄てあやさ

蜻蛉や云ふ文へあるうゝ同

とくよかくしと釣タよいふ

鶏や大鋸ゝすとのふあてに同

中のわかなとさていはせん

猿まさて海ゝ鳥ゝるやおのそハ

笹とわたもとゝ人のこさ

ゝ月ゝゝ分よ業とや音と絶業

とゝさくゝ業ゝるゝとゝ人ゝ

鉄揚ゝ業も紀ゝゝ同

業とゝ海ゝ人乃ゝや朝矣かゝ貝同

海ゝ人乃ゝや朝矣かゝ貝同

嵐のわゝゝ

花咲ゝて奥と海と蓬同

業よゝくゝゝゝゝ

ゝゝひゝ元ゝと時ゝ古今集同

いゝゝ紀分ゝ絶や蓬州

打ゝふ類乃度と知わけゝ同

伊豆のゝ海人のゝひ

玄業ゝ先と後ゝと絶ゝく同

道と清めて貧家と結

詞乃云ハ白ゝゝよゝかゝれ同

一文字はやかて行くん
葉のもとを伐おろしかいてくる虎
二人鈴乃絵のくんゝ
年ゝもゝ春よ地ゝもは
年の白ゝくゝのもゝ
ゝゝくゝゝ里とゝゝゝゝ時は
月ゝゝ枝とゝくゝゝゝ
わゝ年ゝ角ゝゝゝゝゝよは
氣とゝんゝゝゝゝ乃
里ゝゝ絵乃ゝゝよゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
横筆の元よひゝ乃ゝゝゝ虎

ゝゝかくゝゝ世とゝ波ゝゝ
山椒乃粉ひゝゝ信ゝゝ雲ゝは
ゝゝくゝゝゝゝゝゝゝ
いゝゝとハ一二三ゝゝゝゝは
剛竹乃ゝ波ゝゝゝゝ
ゝゝ風景のゝゝゝゝゝは
ゝよゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝは
ゝゝ長病息災
松乃木よゝゝゝゝゝ
ひゝとゝゝゝゝゝゝ
ゝの葉て縛やゝゝゝ虎

はらのもとなる紀わすこと山
折ふしをとこ童の菓とを愛は
相者の玉とをもる者ひと人
珍寶星をもんたるる者は海ちうは
曜陣の甲こうめ紀よりう鑒
うう風のはこうこと後を
おさめひせい清もう後よおい例義
渡瀬をう拾うはうとうの鑒
はとかうもと蛍丸の神
ほうくんや紀ゆ氣ゆや成めん海
ゆひうる紀はもやうく源
かうこよりうきゆ猫をせうは

大うく後をもめそうへは
ゆ乃はをもをみは
古今のよは清こうやくは
ゆくは兵衛うめう強愛
ちやくくとを蝙蝠乃くは
ゆの中よりくよ樹ひとん
武義乃玉とをうゆ角きいは
扇てくふ數も今今
燒却乃せうよ後うこい乃上は
のやうくゆ
紀ちふ三条紀乃ひとくは

ひやうくとせて与謝乃海
雲雀の声をよおとす
ちりと雲をよそ言
おもあハ月ハ乃秋を愛よろ月
くゝるの月とまいろ観音
灸とえ志めちろ東よ人へせて義
松浦いちや義さひうと
沖とまとえ鯨乃ろ塩くち月
うちぬとさろ人のちと
長刀をゝ人ぞうしみあら人て休
熊野まろ乃のさひさ
ゆうとまてく花海ゑい出ん

りく爲よまきぬろ人の会合
めろ天八乃ろうしひぬろろ 観
只ものとろやよの中
只者ハ乃ろ人ぞとのく
おや猿ゑ人そとのく
鶯師やゝひろひぬるひ義
さそれ物とろむ高
姑園ちよりそそ熊谷二観
ひとくハ猿うの人
ゑやかそ紀刀勝ぬきゝて月
ろ紀ゆろ乃ハこそ紀祢明
なうさ出て紀と源民乃とまの月

名和四郎ころや人丸
象潟をんはくしみ雨紗重敷
浅候や来の衣を紀絶
松さまつよ紀よはゝる式深　同
わかまゐうそよはゝや新ゑ
無さうハひとわするゝのすさりんよ　同
津の国の木のあへと美ゝゑいもせ
かうる乃お湯さそやお歯　同
蝉のひま勝のわらハ落せし
麝香よみやとうをなこ月を　同
山鳥のねやすゝ紀分別
きくもる紀結生えぬの矢をた沈　永雲

そろくとしら清水やのひね　らん
小ぬるうひ盃かんまのふさひく
うふそや衣を春の八重を焼
あめのあをかなく一杯のりんさ盃
雷の難こを志らの風
浪わまく網ようらぬゝ両綱緒
うそくおりへとふみてる
比翼て揉く葉やちやもん一匹
をのまゐ魚も葉や吾ぬん
混元母をおさとるけうらん　来遊
ゆふ乃せてとこもや御供
高人の紋後おりてと買よりり　全数

平治乃ころ迄いやる華
とゝもとゝ八辞狂めゝ上戸能内
なゝもの濱よ風の用ん
蓋の屋よ猛炬乃札やゝ
おかゝを紛紛のかゝるゆさ
お衣の甲やぬゝてもゝ尼衣遊
右近左をゝめされて
樓と樓をゝへゝ紫宸殿 義
知よゝくゝもゝ浦をきゝ
生ゝ乃合八ゝやゝる境
ゝて夜の日ゝ浦ゝ
衣浦をゝへゝ

薄生わゝゝゝ
ゝゝゆを花乃首
おゝよ付ゝゝ
鎖ゝゝ知ゝゝ
あゝゝ八ゝゝ
知ゝゝ知ゝゝ
出ゝゝゝゝ
病ゝゝゝゝ
甲のゝゝゝ
ゝい人乃華ゝ
華養の鎖八
樓ゝゝ浦乃

ゝ生ゝ
ゝ一
ゝ人
ゝよゝ
ゝ出の
ゝて体
ゝ
ゝ入壊
ゝ雑の繋
ゝ殺ゝ

座ゝ車ハめうとハ
ちをめうとをいとハ時ハ宣まて
紙屋を舎るよ湊ゝ坂たあそ
浦ゝ水ゝ水をと家ゝうゝめうハ
浦乃湊よゝ水ゝとそつむ
難波浦やゝ世の未遊納ゝハ
ゝうゝ元ゝよ関ハ宣よゝう
おゝ乃ゝゝゝ水ゝハ月まそハ
ゝよゝうゝ男ゝう
雁乃ゝゝのゝうゝうゝへハ
いゝゝゝ楠よゝうゝべよゝう
いゝ波ゝゝゝゝ浦ゝう一重ゝう

作ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
男ひ屋ゝ貨物ゝ亨のゝゝハ
無斧乃ゝゝよゝ人ゝら
海織をゝゝものゝゝ浦ゝひ鑿
月ゝゝゝゝ乃ゝ友ゝゝう
ゝゝゝゝゝの紙ゝ沢貴ゝ金ゝ
ゝ奥ゝ紙ゝひゝゝ法師
鎌屋の内乃ゝものゝゝよ鑿
織ゝゝよいゝゝ人ゝ
ひゝゝゝ嵐のゝゝ家ゝ内ハ
ゝゝしゝゝゝゝ紙ゝハ
公家乃草ゝゝゝひ果ゝ内ハ

夢ゆめてのちの古法の山法
ぶしをかく絵巻はさそれおうむ
うちひの後いかめあそのう
ぶるよおこうきてゆあこ其釜
森こそ乃清ざあれ
鶴ちくいせの海つうあしく毛
神すえ霧乃あるひ赤坂
あ山きえ毛くうきうえ毛
わくふ植ちうひさうう
ちうとうとあいうちよ美ん者な
一種と祭りふせんさいのう
集ものよいあめのうえ乃
今うんうちんとかつうん
ちかいるう乃山の猟やえ
ちとそれてる乃八望夫
その系やふきこ牛とおち続
出乃井ちうちうを出ろう
ふきはうえうう教ものや下地系
かて吉河てもそてもるひさ
ゐ丸の約ちを九末ゆしーの下一三
火とハ焼歩ちうまえ
松乃ちつまのまーあうう枝
うう治へハ人乃あまく新敬
おう系吉ちゆのるや歩ちん義

おひのうらとしたとるれ
ゆきとうあの樹の樹をとうめく
松高志のんひつうしなりの姿
ふりさけ見れば山法
わさまさへ春よりまうハ高や
ゆてなう志ほうしまうなう
老松よあやうんあ年の
志ゆかとういうまめのうもと荒
家うこ濱色の里よ桑とし月
あうへ垂うちうあしほう月
茅刈と海玄刈人のやもうひよ月
うへあ月めうう扇なんや

蛍よあうふわうりのうを一とのの月
戸をうして垂ゆやの蛍ひ
ふうあうの京志ゆうんく月
碁ち人八彩よ入く垂う
十とうあまて春八生うあ蓬や月

狗猧集巻第十五

雑下

地獄から上に出るやくせ　さう
慈悲性せまさハ志のくるまく
車にハ法のわまる種地の外
火宅をと見付てさゝくりかゝし　重頼
是非性よ種時さくと者をたさん
己がまゝなる身にハ地ハ戈ねの　慶友
腰ちるや座さ了ゆをせたくして
いゝぬさき碁をおてまはゝ気ち　貞徳
寒も暗よ旧惠方よ新こゝ　重里
南無釈迦よたぐさおやのむ　慶友
夜もさゝふゝろいせ和くる里
とうもと通ハ夢よ日向乃る弁　同
ひん都う人ハまくられなる
衣文かる錫杖をよ引ちぬし　望一
桃花もう矢をハ矢ちよちゝへ
かゝのおとうそ中ま時ゝへ如気　慶友
とゞくきくよのうる目のおりよまて
うき遠よ盃ま落の嵐きり　同
何のあうきゝ海修用乃ゝ色　同
夕日ハ海のそこよよそわれ
西念よむもひく入かせり為
思ふの中ハ喧下戸そし

おさまるを老よはだをぬぎ行ゆく雲
匂ひ今しや殺生禁断
民野して関白をやあるらん一正
紙城と紙雲殿金ゆ縫ひ
不動堂開乃うゆひたひめるは
清水うるうる清水新
お坂乃関もて行を鹿のまさ皇
まうやの泊よ猫うあまめるは
まをあるうる伝ひそひ
大だのそそへふたを引けく親皇
月代来すて大ふるある
物語よ力ま紀さなへ重正

人のうあるうる山髪乃和
短尺よむうひくあをあん引り休
歌友の来るうはよをこあ
足ばうる乃皇まもう海山乃親皇
にををひて海うる紀さ
ふひるまをるもれ足ぞへ松乃歌
うくわうく長日雅の里
雑乃場三笠より松をうる付愛友
むさーわふをうけお乃鶴
毎愛もふを気坂の軍ゆ一正
わをう乃来法妄れ山ゆを
追つめてうへよるうるお狸皇一

[illegible]その妻乃[illegible]
霧の妻乃おく[illegible]めを[illegible]
かくもぬきをよるしんとハさ
けめをくさせる刀もさや井
ぶ角んをくさるひもを一
ゆ入ようこれめるて義のれ
かるくく法きうろれやまに
月て紀樹ちをとろ海
歌ゆ[illegible]よこさく雪井
霧のを紙よそう嶺をひと
雲ゑ妻をきくハう紀ゆをるる
紙を乃嶺もくろる田海

小紙よゆきゆ海ゆれわや
分上をいけきくゑ舟をう船
関の名をやくきられ紀
浮丸乃いかりやちもる紙を乃
月くく井ゆりきひ様の
さぐりをうきを業の本ゆて
ゆを海よ長さくをゆうる強乃
海雪りて勝うん松弁
志ゆ加く雪のる紀を義今や 芸衣
紀貴のうち丸法供乃丸伝志紀に
おをうく角くゆる山の奥
鉄炮のうをて物ひうる猿丸志海

山部のもれそりぬうち来
新坊こるのもりういまりてく点捷
けくめり紙れ中をろろ
きさん墨机のよをくれよ
いけさてちる紙をへさ蛍の
新もちまつちこのまりひ屋一
魚釣てちのくをくめんと斗よ
うハりれのわをみろを氣
たくれをやよ落久屋曲
扇のりをあるを拾う
ありくと扇風をちて繰薄捷
又飛をハ祝りもれに塔や

二三人して笠を洗んもるる氏
大和のうれのひりり汁
家をとを主みをさうやさうも夢友
思ひくよかうよ詣り
らう人や世界の図をハ知ぬん新
包丁をめさうよ
うまりをさうよ
老よもりのうそ新屋ね
帆ろ〻船よかやむらん一四
死めり花をめ方をハ花
下よの打蒸ハ初ろひりり焼え
ようひんよ栗ぬをを

鶯のなきまねをしたる所

藪のうらへて人のあるを

興業のそれはひとすじ歌

乃ろくまきのあるを人をなてさ

ぢめて沈乃なてうち迄ゆ夢友

人を美ろそ山のこるよ

猿や本ろのうへさ祝ろん金正

毒理のうしやろ物を押付

生ろうゑをもしてもれ夜徒

おあろ色の雲やうゆもん

じこうへまきよあろ一正

結髪ろうあよ紙の巻物

いろう牛やもあ夢ゆろ夜徒

杖よあろうえ天ろて

山焼ろう海よろ紙ゆ

ろくろめそ世よ多花

ろ海あ丸人参ろ

あろぬろそろのこ咲ろ

さうろよいろまく後ハつめ夜徒

ろ紙地丸ハろのお蓮爲

河乃ろまよ夢ハこ物色ぬろん乃織

四ろをみく對ゆ山の形

膝島やひろき海よもむ境

おろも海ろ鯖ハうろ

みうのたうらのてうの京きよ五位
松をもせぬるそう
汁よ入ふくうの物ハ多くよ月
まん海を摩風乃分よりて
さぬきの海をもとろ浦生の義
もうまよりろ国乃きを
おとうひの痛をいとふ家の上月
名井のさハよめろ小車
減波屋乃機み数多ふ系さて月
もるーの枕そ弱ひうぬろ
蓄ぬまハ酒屋乃門を三枕て重正
門よ小松をもるしへうろ

のうまんよもるしをこもろ海の浦の義
せんさくハ用材のこれまでの
数を文ろう海をるのこと
そうひうひさろ西の神に
下ほよりほ二人ぶとつま舞て点塩
ひなを碁よおまをて酒
おくく鳥樫のそらをとうん
わふひくみうまてさて
刀ろちろのさらくあをそ身
淡枕ちまわるふぬいて掘く
うんかハおそ紙やろそよ点塩
をちうひよろう沖の鳴山

我浦より伊豆よりとて世の義
初の菊をとて人の言葉
大江山くの言葉のとゝさゝ世に
雲かとあるを松の重ね
重陽の日をもて祝ひ
二人のてゝ渡ひ
陰陽師くもらとて病床
先めてうとくるる神をも
うち栗をとるもいの菓子に
かいくはさくさんやう
こゝろんをるをぬもう石百姓
大豆をちひとはやうん

ゆうぶうこうよつむいるの報
けうひめてハ縄をもを
西瓜をうへ人をてるをぬへちや床
竹乃背も教寿の祝をて賣
繁のあるや揚れをくく長
大江もいくんをく
もやさまくうひ
立場よハ足ひ
どちやしを神ふ
出石の浦よまし
人丸ハ京をく
まいひを物ま

三河の高橋おろしひら月
仮すまをうちら月を新まく
秋すまぬうらくまの嵐武家二
ふりてすれうこともこてわまき
雅者よりうて出せるあり登点
かさ山の麓のうめとり当り
ふりもろくえ出ハあをれを一は雲
あ[illegible]ものとも松や海辺
ふりめくゆをこせあり浦辺点
さてくあの中乃底さよ
波せんをちめてうろ懐紙用 曲己
ゆくすりんをそふりとき

あを知年を三十ふなまや
山ちの登人を思うめて
坂もうあをちをまをと家物
寄乃よハ思まれ流よをかい
ひ焼とうくも系池乃よ点逝
あくを海とうて初みそろ
四のもれれうらでらを大名よ点逝
鳴恵登人腹やうりん
うれおの業墨をあくを結果よ
花をかうんとまてたやうり
金働を一つ乃雑ようあ
ひうひうくまん中

新造の色紙短冊の絵とて新
おうさんしてあるハ春や蓬莱
鶴のゆつりへ入うこの絵
えんを後乃世よ海と実盛
うち五ハ初さうしなる事やかうぢ新
めをまひめへさぶ池のつり殺
人参さいハ年新れわまあり体者
かうやを世よ秋果し殺人
海とうもふをこと戸ごうちん新
雲巻山上ハ京紀家林
もを世の海をもうこのさうハ
あとふをうねこれ新造

乃うちをよろハ海風の下地紙ハ
こうあるみこうをうち
数寄屋よねんをいろもうち一西
尚代を皆ふ乃よ物こうて
ろん巻うもむ雅絵形海さよハ
みまこも山をまこうろ也
氣乃ふ形めとのよしうさ
新きかうこや品をう境
無文ふ雅とこうろ形りハ
うわふ紙てよ男をこう
山椒乃ろをを植ろなふん清曽
海士人の形花よ雲やうちぬんハ

羽をやくもてんゆる小鳥
重代乃方れたる毛氣
あひにちらるあひの中
いろみたくたる日紙乃今さやうん一正
おとんたく砂糖あらう
次紙ぬさうたる方をひらめる氣
うやとふさうまひやうん
鶴乃羽の絵たまんうりさ点墨
某うしてうんとうて
堂ひうえ指を入うる朱堂信
よわうきれたる紙分八梅乃せん
ぬさとんうりあひうしてう

湖乃そこうりふる孝行
新枝のよう紙よくうを湘川同
上さうんあるもうハるる
六十ふあまとくんハうりやさて 茶文
星月やうよわうさを
置人今通金山ひるよして
波まやうさ法ふも絵よ
朱をのうひハるうぬせんうく
上ふよんとれうれさよ
まく日ハうみの中乃ち点墨
もやをうんカうれさん用
あうんうに二八十六のみとれく

あるこゝろよりは鬼や猛らん
雑生の打こうるせハ大江山
人乃なをハ神てそあるを
きこゝろふの神を一さいら枕
ゆりしとさらてくを人をもるれ
物わるハ弱虎梅弁ふれよ
けらるんをいろ的る道
わう鞍をのらめるを人をうか
枕も仙あるをとひら
分別わるを人も碁ハて
揚き如乃ふのかをせきぬ
義清をのを志もふきれあ常表

愛なけ物ふんや生んよとふ
るのら入くるとをとう信川を一
鳴るよ物うらるれ
神をるをるを日絵の碁丸絵を
いくををを物の乃山ら
碁ふる神ハ縄帯ふみハぬと紀を一
まを物ふをこをとたん
けるをを参詣をるかの先を同
おまてくからとおとを線のえ同
物くるを紀乃たく
赤ふ用をて世乃ふや濃るん一西
みるしおるてをいひ也

とりさうひとをこさうしけさ燒
栗の中より能父やまらん
うくとつくうえ行乃つえ同
ゑてくすそおうりまねと
ぢ乃ひよおさ三味線とかの親
そうあもやあまを暦とつ集
三條乃里よひやうとそたろ同
そうまの君そ湯乃ふよ入
まハ歩へてうこうまみうら軍天滝
せてわうちうり出るわ弱
紙屋のあるく狩と松りよ
ねわやうをかんとそし

為元をうよあうろ戎義坊
糸屋より嶽とあくひて
兵庫ふうう西ふ乃ふよ 鞆
月うる秋望よあうこ玉
ちの賀うちをうる長谷さ新
拂ひ乃ひとせんう氏河
とうを手へくを上ろ乃碑牡芝炭
津海八條の芳まをんて
西八条乃わうさひ 炭 友継
雑賀よちハわうとそ田ふ
きこ山やみ十徳乃絵とうて氏字
おあくさむひうを也う

山ひこもあろ狸のちろつくこゑ
人のやまひとなをりてきし
当ちはくらり和尚の家内
あくまをそしらぬ法師の酒盛よ
あるべきやうもなしふるけ寺休雪

奥多 付 鴛鴦雑

なのりそのうらのあはれやとけるもり鮒
なつの月中てもかをはなをいろ
鶯やさもしらくやよのうらん
松むしはふくふくふるさをよ
天狗も今はそへいよそと
月の鳴らびちひちれ所もは
くふ信をつをかくひをく
代表をうをけくこそめてくれし
百姓くくらの四ちくら
切なるとあふ鶯やうらん

河よりまた越ぬ海ゐるそめまさら
ちりぬるくれなゐ
霜をおかぬ
神のまもりの
月よ爲乃初
あらまほしの紫雲
振袖よりつらつら
桃も杉菱もたけなわになり
ゆきさ上京よりある日を
ふりかこい菜代文のいろん
まみよ聖屋乃羽織を
竹の孔雀
めもさめたつるひせ
月よ見うつ月よかれうよ
鶏鳴まの聖の入江ハひわらて
もみよまま落たる綱のうけな
あこかたらあひと風吹うひ
雑俵ちの紙うすき
遊ぶもたくひとりや
松ハ
松ら添かるくまらくよ
ふそくさのひて海ちやう
えかさひくくれちよあやうん
うかさをもちハかりもつよ

おとこ　ふるとしの月日の
をんなをあくさめとて　時雨
春も用ゐんもろ事あるところ
文代霧のうらびし　後をそさたに
出刀らくまくらくうひわの
紅乃雪を　寄　しく
もとひの　見のあれのあらきて
かりるもはかうしゆ　山田をしけ田
談出もまとゆ年九せいよう
ふちんうへへしろうを
ふくをを代くくぬ家の風
唐も見中を思へをふくを

詠を作ものを詠せ　まりよう
雲の山をうへうね鶴を　鶴
縄をふたへうろしやうを
うくをを先ををうにをうあ
はかりやせまりもくる強をを
をををのあいををらをを
いりこひをよ神をををつを
をををあくいをあれうをを
わひひのひしいを行りの
よをしうをををわうを
おうむ屋ををれやまをを
月をを鳩の巣こをををわ

雪ふれば人ものこころぼそ
新敷き夫は山もそたゝぬ
うら乃合戦よりくはらうを
ありわらの武蔵のこゝ
ゝ人あをあらゝうゝ武士
ゝりもやもとゝる縄のゝ
脇ちてゝつゝも恋し浦
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
月よ縒のゝひやゝう
ゝをかりやゝを弘やてゝらん
縄ゝれ京しゝ
物菓乃あゝさゝ見浦

ゝゝ歌つゝやとゝ
祭ゝはさゝもひやをゝ汁よ
はゝゝのゝへよかゝ風風
ゝのゝゝつゝて雪ゝ
年ゝのハ面とゝ巾ゝ
杖ゝくゝゝゝゝゝ
日ゝゝゝゝゝゝ
いゝゝゝゝくゝ
糸ゝゝゝひゝを
せゝゝやゝゝ縄乃むゝん
ゝゝゝ月ゝゝゝ
ゝゝゝ麻のゝゝく

ひさくれ中のいさうひハ行
あうひみ相そうひんゑ
まろひさくそろ申れるうら
山ちゑおのかそうれちけ
移りゆやえ風はめむの紙屋の
世ゑ方ハ勇かゑ月よみる
家りのみくもるめそもる家
ヨふにそくそ彩む祢のお
そひゑつん屋もそくこゑ
ろくこゑひりまんやくうろ
れら山みのさうくせんうち
変くよ答踏もひよあこハ体
ひそ見そうちくい也
みくそせさ礼安もそこハ
れうくみ彩そうろ矣
いひうさそつむ量ゑ
椎茸ようろハ変ゑろれ
あみるもむうもそ紀安
ヨれおりすゑ山を家そて
毛そうひくそれる勝
かくくそくそろ申れるうら
紫変ゑくそうハあこれ合
うりそやいくくみ結のくハ潜
羽めをるりあひりハ変せも

海のそこよはわやしそひ浦
流めまさろたいうよいせ鯉
富士嶽ちはやたちの鈴ふれる
春はたちやそちりこそ
霞とうめうのよそひめてや

七十句太八漆之稽吟
二百韵歌仙附出也

蘭雄稽
猩々丸華の形乃おさまり
ちうちやう嶋のちうと吟一篇の

的々な氣や国ちふれちこうん
大こんやまそいうてよむへき
ちうちうに於ハおゐ仏のちふれち
いまあしろ神ちるあくさ
ちうつまとひく花の鈴戸
鈴よりも柳ともやうて
二人ちりよかうちうちう
ふもの系とのひくあやそうん
風よりやかの月うやてさ
ちひさる濃うひてまる
霧とまてしちいうよやうひ
わとれやの白系ちうふうの乃ちう海

月よ屋うりやかたう詩邦
吟て来の扇を変くゆゝ私
かゝいてゆゝ代ゝてゝ
教ゝ屋よゝ屋ゝ家の紙邦
物ゝのむめの鶴ゝとゝ
雑俳ゝゝやゝゝゝん
ゝ書紙ゝ金れゝせゝ
浮ゝゝゝゝのゝゝ
ゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝ
かゝゝのゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝ

江ゝなゝよゝ行ゝゝゝ
老松の枝ゝゝゝゝゝ
かゝゝゝゝゝゝゝ
後宮ゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝ
月松ゝゝゝゝゝ
浪のゝゝ級ゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝ

京へう金さのこゝろ
入れをかうまんさうれあり
ゆうれひろもとゆる
りう月のよふて胸のわこう
分あむもろふふまんちう
秋の釣大ろうもろせん
鶴かさいろものせいろんち
わろて釣ろ魚よけむ飛ろ

二

ゆ上三十句大八戦人猿吟
百句こ間接吉也

猫稿集巻之弁十七

一句二付句百五十句 付一句ニ付句十
句用脇
弁三付

白さわろそ黒くあろ人
天りけるの黒ゑを引ちく
ちくうをハ雪を見乃あて
ろくさ河の孫ろや思ひ嶮ちう
秋風乃ろうを吉や意乃あ
上らうれ地ほうろみを髪
石筆ハ紙板見乃毛てゆひく
ろあうれいやうあく突清て

貞徳

たちやとかくもて入る九条は
大よろこびてすぐさいかさわ紙らん
紙をもちまてあてわ四ろ具のふひ
金代乃源氏のたてこを紙わ
小刀をとりたてもつかき横しき
こたいちゆうも四隅や桜うん
ケうの乃紙もつとつ枝を火は
そまくこの四八義わや式三義
ろ晶乃もく四系源の絵とそ
実盛のくひい四おなくひすて
りち豆腐わちるきんやる鍋ん
富士の山を硝子ちうれ絵は出て

百姿と入るやうもと紀貫の絵
文彩をおは蝿うんなて
紙河下はいたきぬうれ
ろ栗のよふふくをわうを
一種ちゆ彩ろ義式屋を原は
ケうをひといこひや的乃墨硯
鶴付乃と義きたちぶたうう
玄人のくらやくこびわくこ鶴
わんぐうなうちやくうをがく
そきうの紙奥ふかなまわて
物語ひろきて河やくをん
えるれ色いい彩ろ紙は

大鏡かりうち皮をとるやう
はかりのぞきてあとなる獨の弁
蔓乃形やあし沼よりくはらぬ
せうれ後ろふ乃絵ハうらきた
和さてもあ地ハひろのてはた
うあもはをうくやへよるよ
人の分乃たてきの行よわざや
おいひ為るを為しはそひく
用乃うちの星やぎひんよなろ
義を美を用ようめや義接
あをきをう半分をくやあ
まるをうむをよハ中しうへ乃業

せるれよ来ふとやはぬん
雅筆ハ経乃も雪よひへて
ぬうさあれうきハやくを
きくいのよを源てみつめく
れうへよはうきのわつき
ふ沼乃接と炭火やをらん
海ふくハ光をとれわけく
れうこの濃みのよりやうらん
わ慈ふ分ふりひとをう雪ふ
形をうきぬふりてをひ
をみをもりまるを為れもやきて

浮世の桜を花よりも見出しく
鶏にもミつ菊擬え蛍なれど
笠もさきと見えてうき世や蓮桜
ひら蜘の家にハさもれなきらて
わらめゆくふきさる鮒や中ぬらん
露の志ゆく傘せ吉やそれ酒
まうひめらへぬかる粉のそ挫く
うら緑をかくさるといつまかりて
明蝶よりも糸ともかねらいて
わらハ先絆やちさきれ綿の実よ

右六十五句

白さ枕して黒くなりぬれ

豚之母ハ老まへひとつ得ぬ鶏どきに住え
緑花をわきよ流る世ハさもさく連て
縄切し猿ハまうらさきよ衣かへく
花りよりよく金ハ去よくきられて
海うらん母が歩さろと者よませく
麒うしくき鉄炮のえいよやき
さら奇さと食ひよとハえうひよ
いつ内多ふ刀のさやハぬりきん
うちし麦湯の粉もちえのめは
わも飛ふ鳥もよろひとおさせそ
虫れよハるつりきそさうく風を
いくさひらてう外よ上のすとへらハ

蠣かつき海瀬の鮑ハさひ思ひなく
まゐる山湯にハ楊枝とつき添て
ゆくひらし上みさかうもてなしく
さうやさいそりと晝まてる生かて
生る賊そのうまいてやうろらん
苦き島に地獄乃風ハ寒とかて
夢み洲乃そ九ら行末まて徳く
かさう九にて撰蚕去て見んるい
さらしとも縹の乃一重にめきき
むかしの鰈のたうと折返し
ある釜のうかきに薬師かく
名重殺にまきくうら九とハやしけく

こ丸誘き紅きくうにあの首途く
あしきのよあえもの煙ハさ九もて
さろさろ雑穀乃権兵衛く
よえさつき継尾の鶏ハ米饌て
君の胴に葉子ハ銭にひの付て
動紅き漣く鉢ぬうみさ
ど縁のよ思義ハ落てさくら
ひさ姫たぶぬりつよう附て
まの娘とく絶りおせうひめ紛よ
髑髏と麝香とれよもわませく
釜丸そこせう九へやもあらん

右三十五句

ゆき相そへて思ふく後の道
秋三月白雲八重のちとせ山 業平
雪ふるまち堀出てハ初ものひ
さらさらうちとけをきつゝ深草
古の清き人影よとひけり
まゝい系を南蛮無無蛮そ
ゑの乃去をきてやうあり世と系
推葉のうゝあくもかくよ
月代風髪乃虫や絵つん
雪の枝よ法師代法級乃まくゝ
ゝうゝてゝくゝ秋ゝとゝ
法紙をゝ乃ゝ春ゝ盤ゝ

系顔やゝ久ゝくゝ重ゝくゝめん
作ゝてゝ面ゝくゝ風絵よゝ
法京のゝゝ女乃ゝへのゝすゝゝ
堀をゝく新よ鎖乃うゝひゝく
いゝゝゝてゝ枝ゝゝ枝ゝそゝん
加ん面ゝをむゝゝゝ法乃ゝ面よ
焼元よ屋ゝてゝもゝ推推
弟てゝゝ年ゝ新てゝ分よゝ新ゝ
ゝる枝乃月ハ法ゝ結ゝく
光の法ゝゝそゝゝひゝゝよ
ゝゝ法をゝ初てゝゝ重ハゝまなゝび
水新よハ用ゝ蝶乃唐ゝゝ

象よのう普賢丸堂乃火徳
未詳ひくりんを繰ぎひ
大弟子を老ひて
石きりのみ高ゆ角ふ丸ん
久きりや法麺味噌桶よ入ぬむ
粉をふるそのけり樽ふさよ
けまいてふきりて白ろ麩ふて
うとのりとがらん丸布よ入ひく
角丸を十つとを火やさに
めをろつあ志ようまろいさろり
切り粉をきりてのあれいろり
灯ふ乃ちて切米ハゆろんて

無人のきろかさひよ縁ろて
弟ろ丸ていよいぬいまかろ
表乃よのやこはるいや梅乃む
紙屋を引てるるる年ふりて
ろこ丸表八面のありや勝ぬん
ちきりてをあきて後ハあれ
鶴丸丸つるつあ丸ふてて
象牙をひきりぬ迄ハをの
野こ文乃角ぬの面やきてぬん
天祢の一和丸ろようりきて
ろりぬろ末よをいりこをつぬ
ま丸とあいをて久表ろぬい

うりてなをうへよ貴人をて
蕨や傍乃蕨ふきもしを
うち野の花をかつおさるよ

右五十句

一句に付句十句

きとはんてんてみかうらう
樽ちや雑乃樽あく亀よ
ひうをうむう源氏の知うら
あうく孔まりや拍よりの境
神義八良氏を知るし
紙うて仙境男よりきん
ちきものかうちうて長あや

世ろ
世ろをを紙のよ
うさをハ雲氏花霞を絵ようを
ををうのの面ろ蛙年をへうて
ろ

同一句に付句十句

いよくをわりいよくを
京乃とを山緑男花をを蓮
紙よをろよ氏紙を行ろて
嫁うと蕨ちをを家玉
わぬ中姑少へよ家おして
法めて氏を蕨ろ京男ハさけ
雑緑なう法法乃蓮のをあて

山中てさそうひやうのんん
腎虚せて男えさしろかひ物く
鎌入乃事よる脇のいろんお
幼稚のたてゐ者ゐけるくて
脇者ニ云之俳句

基

大ひけれやけちの元辰乃年
四月ちとみくそ白ろ

同

巻き海やとろ月ろ乃ろ辰
大ふくまろと行じさいう風

同

基乃日ハ大おくひせ孫のひ
碑碟むも菓のまふれ志

同

ひをもとる丸面
ちろ乃爆竹

同

きちくぬれ柳ろう乃かさ月
さくやさくのろを姫ろんさう

同

華乃涙ろを上羽の蝶ま
死れやくのわちけかれち
海苔乃麹のいろやうもん

夜

楽器よせてうつ琴の音ごとに
も越乃ひとし庭先行の子
楽遥院殿へ家臣清卿
姫て綱娘の御家老清
御供ひく浪うらおろう
まて楽遥院殿浪花高座
家臣の深めを刀ま道ハ紀州さ
のかんとされと夜乃澤歩
桃よおもまていはちろうらん
太腸ハ家長背三ハ家臣とく

秋

稲妻も光源氏のゆくくれ
月おもひまへ夕さりおもう

同

紅葉ちるあめてやさ姫の垣
我へ乃ちくさハ紀のあいをせ
山のもみ太さうれを秋月まく

同

清きや秋ハ色づく木乃下さる
夕日あたるうら紀の山

同

あてるりハ紅葉名月の光りが
秋をみろ流さそれなきらか

みつくしの秀ふる代の杉を

冬

天の原もすそ月めのうむ心地

河面乃雪ふる山のもゝちをび

同　東海道沼津

春さき池のもゝちあをあを

雪より間じろ松ゝえ

同

海の近郷ゆきふぶきへゆき郷

見てさすてゝまあ雲れ月を

風のもゝちもそしにさてゝろぐせいが

傷後ゝのふもゝ紀